

備陽史探訪

第31号

発行

 備陽史探訪の会
 福山市西深津町7-2-7
 印刷所 塩田印刷

「会報の発行」

について

会長 神谷 和孝

会員の皆様、今回の会報読んで下さった後の感想如何でしょうか。

前回(三十号)から体裁を改め、今まで手づくりであったものを、印刷所で印刷することにしました。その経過とか、改めた動機については前回詳しく記した心算です。ただ、前回、紙面の都合で省略した内容を今回記しておきたいと思えます。

第二十九号までは会報編集部が総て責任を持って、色々の苦勞を重ねながら編集をした上で発行していましたが、三十号からは、と言うより、今年度からは評議会の委員の皆さんで、協力して会報を編集しようと言うことになりました。(最終的な段階では種本実氏の手をわずらわすことになりましたが)会長の私も編集の段階からたずさわることになり、

実際に紙面を埋めていく作業をするなかで、今までの会報発行の作業にあたっておられた方々の苦勞がよくわかりました。限られた紙面を原稿で埋めれば済むと言う、そんな単純な仕事ではありません。少しでも面白く皆様に読んでいただけるよう、集められた原稿の配置を考えたり、依頼していた原稿が期日までに不出しに、それをどう言う内容で埋めようとか、編集には実際にたずさわってみたいと理解出来ないような大変な苦勞があることを、会員の皆様には是非知っていただきたいものです。ただ、決して苦勞の押し売りをしていいるのではないのです。皆様にお願したいことは、皆様の手での会報を作っていただきたいのです。会報は会員の意見の交換の場、研究と言ったら大げさになるので調らべたこと、興味を持っていることの発表の場と理解していただき、どんどん投稿して下さい。皆様のそのような原稿がふえたら、編集の作業も本

当に楽しい仕事になると思います。今回、五月五日の「親子で古墳めぐり」の参加者の原田君姉弟が感想を寄せて呉れました。本当に嬉しかったです。

会報への要望

郷土史愛好家 A

「備陽史探訪の会に對し何か意見を要望を書いてほしい」と言われ私としては以前より常々思っていた「会報」への要望を書くことにした。

私の要望を一言で言えば、「会報にもっと会員の知識(むろん郷土史)の向上に役立つ内容のものをとり入れて欲しい」ということです。「備探」に入会している人は老若男女、郷土史に詳しい人、知識の浅い人等さまざまな人であると思う。しかしいずれも郷土史の好きな人、より詳しく知りたいという人達であろう。私自身最近かじり始めたばかりでありよく知らない。自分で調べたり勉強すればよいが忙しくて、(言葉

を変えると横着だから)なかなか出来ない。講演会や現地探訪にもあまり出席できない。

こういう私の様な会員の方も沢山おられると思う。そこで、この私のようにレベルの低い会員のレベル向上に役立つ「会報」にして欲しいということ。会員全体のレベル向上が、やがて会のレベル向上、発展につながると思うのですが、具体的には会員のレベル向上の為の「郷土史講座」(仮題)を設ける。その内容は、人間的なものからだんだん高度なものへ(郷土史書にはどんなものがあるかと、こういうことはこの本を読めばよいとか、古文書の読み方とか)。

古代から近世までの郷土史シリーズ。備後の人物史シリーズ。又断片的な形より、シリーズで流れに沿った、(つまり歴史の)形にした方がよい。以上好き勝手な事を書き連ねましたが、会と会報の発展を願っているものであり御理解願いたい。実行のむずかしい要望もかなりあると思いますが、これは私の「案」であり、編集部の方でやりやすい形で進めてもらえば幸いであります。

会への要望

小林 田鶴子

紫陽光の美しい頃となりました。皆様お元気でいらっしゃいますか。

この度、会の方え、何か希望があれば、書いてはと、言って下さいましたので、私の個人的な我儘なお願いを書いていると、御笑読下さいませ。

文才のない私がペンを執りさてと、何とお願いをしましょうかと、迷いました。

あちらこちらの山城跡や、古墳の見学、勉強を、楽しく足元も軽く命の綱の弁当をしつかりと手に、皆様に遅れてはならぬ、皆様の、手足纏いになってはならぬと、頑張っていました。

だが年は取りたくないものです。翌日も翌々日もいさゝかグロッキーとなります次第です。そこでお願いがございます。

会員の中には若い人が沢山いらっしゃいますが、御年配の同好の方達も多く、頭や体の健康の為に参加をしていらっしゃる方も、居られると思います。

細く長くがーく続く勉強会にして、戴ければ幸せと思います。

先方さんが逃げないのですから、ハードスケジュールの見学にしないで、同方面でも、何回にも分けてじっくりと勉強をさせて頂けば、右の

耳から左の耳に超特急に通過をしないで、少しは頭の中に途中下車をしてくれるのではないかと、愚鈍な私は一人言をこぼしています。

スケジュールを組んでいらっしゃる役員の方々、御迷惑と思いますが、もしも私と同じような考えの方がいらっしゃいましたら、御一考の余地を、お願いします。勝手な事を申し添えませんがよろしくお願い申し上げます。

会のますますの発展と皆様の御健康を、お祈り申し上げます。

古墳めぐりをして

原田 由起乃

私は本物の古墳を見るのは初めてです。学校の教科書や資料集に出ていた写真でしか、見たことがなかったもので、とても楽しみでした。

最初見に行った古墳は、盛土がなく、私の思っていた(仁徳天皇陵)のとは全然ちがいました。説明の先生は円墳だと言われたけども、ちっ

ともわかりませんでした。

それに昔の人は、今の様に便利な道具はないのに、石室に使ってある石は、凹凸があまりなく、表面がきれいでした。

私の身長は三倍ぐらいある大きな石をどうやって山の上まで上げたんだろう。盛土の土が六世紀に作られたものだとか教えてもらいました。

千四〇〇年以上もたった今でも、その形が少しでもはつきりしているという事は、古墳が強く固められていたということだと思います。あんなに固くどうやって固めたんだろう。古墳時代の人は、大きな古墳を作ったんだから、今の人と同じかそれ以上のちえを持っていたんだらうと思いました。

原田 君平

ぼくは、こふんめぐりでいろいろなことをまなびました。

たとえば強かった人や、身分の高い人じゃないとそうこふんは作られない、とかです。ぼくは、近くにこんな古墳があると知らなかったし、こんなにいっぱいあるんだなあとびっくりしました。

それとこふんの大きいのは近くにあり町がみわたせるように作ってあり

ました。

こふんに入る人は、たいていそこをおさめていたらしい人やその長者さんじゃないかと思いました。こふんには、たてあな式せきしつと横あな式せきしつとはこ式せつかんとねんどかくの四しゅ類があることがわかりました。

ぼくは、いくつもの山をあるき回ってとてもつかれたけど、その中でいろいろ勉強になったことや、楽しかったことがあったので、また今度もいきたいです。

好き好き福山城(天守篇)

―天守にも一度覆面を―

吉田 左京助

「わー、なにこれ？断食した名古屋城みたい。無個性ねー。」そうだそうだ。実際今の天守は没個性的な建築だと思ふし、だから人気も無い日本のお城ベスト10をやったら20位にも入れないのじゃないか。元和年間という、築城技術が完成した時代の建築だけに、そつなくまとまってるけど、反面型式的で面白味に欠け、家柄の良い、ひ弱な武士 といったイメージなのです。

お隣の岡山城が、アンバランスな外観ながら、荒々しい野武士を彷彿とさせる姿で、鳥城の別名で全国の人から親しまれてるのに比べると、残念だし寂しいのです。クラスの人気者にはアダムがつく。優等生は人気者にはなれない。この真理かなあ。では福山城は人気者にはなれないのだろうか？否、古写真を見たまえ。焼ける前の天守には、どこにもない個性があった。五階の高欄をぐるりと囲む雨覆いと、北側の壁面に打ち付けてあった鉄板だ。

雨覆いは、あたかも覆面をしたような外見で、天守の姿を引き締め、武骨に見せていた。これは吹き込む雨風で望楼が腐朽するのを防ぐ為あつて加えられた物とされるが、案外外見をいかめしくする為に作られたのではないか。

戦後の再建ではオリジナルに戻すという事で取り払われ、あたかも「覆面取った怪傑ゾロ」といった間の抜けた顔になってしまった。北の鉄板を再現しなかったのも、ノンオリジナルで間違っている。

「わー、これが有名な覆面城、福山城ね。高貴な、それでいて凛々しいお姿。好き！」と言われるよう、戦前の姿に戻そう。多少展望は悪く

なるけど、どこにもない外見にする事が市民のお城への愛着を増し、観光客にもアピールすると思うんだけど。牧さん？

我町の史跡

足利房丸と百谷

田口 義之

各地の歴史を訪ねていると、時に不思議な人物に出会うことがある。現福山市加茂町百谷周辺に遺跡と伝説を残す足利右門大夫房丸もその一人である。

足利房丸 さて、この人物に就いて近世の記録は次のように述べている。「八幡太郎義家二代後胤足利陸奥判官義康十一世足利朝経賢同豊後守義範実者征夷大將軍從三位義澄嫡子也則義範二男足利豊後守右門大夫源三位房丸」

要するに房丸は足利十一代將軍義澄の孫にあたる人物というのである。これが本当ならば誠にやんごとなき人ということになるが、この地には房丸の伝承だけでなく関連する遺跡も点々と残っている。

房丸神社 旧村社。房丸の霊を祭る。東城行のバスに乗り、「真光寺下」で降りると 谷中の小丘に鳥居が望

まれる。社殿に登る石段は急である。**房丸の墓** 「真光寺下」バス停から千米下って西方の山中に入ると、旧庄屋百谷家の墓地があるが、この中に一段高く、三基の自然石の墓がある。その一つが房丸の墓で碑面に、永祿二年 足利右門大夫房丸 智泉院殿釋名心大居士

未五月六日

とある。**房丸屋敷** 又、房丸の墓は元々ここより数百米北の「房丸屋敷」と呼ばれる地にあつたという。現在そこは国道一八二号線の敷地になつてしまつたがかつては平坦な屋敷跡であつたという。

龍田神社 百谷から北に一山一谷越えたと北山芋原である。この地の産土神竜田神社も房丸と関係が深い。社伝によると、房丸の宝剣竜田丸が御神体で、寛文二年の創建という。

開拓者達 房丸の伝承が真実なら大変なことである。足利將軍家の系図を一部改変しなければならぬ。しかし、房丸神社といい、その墓といいまんざら仮空の人物ではなさそうである。一説に房丸は宝町幕府の管領斯波氏の子孫ともいう。

多分房丸は高貴な血を引く人であつたのであろう。そして、宝町末期

の戦乱を避け、この地に土着した。伝えによると房丸は家臣十人と共に百谷の地を開き田畑としていったという。

百谷はその名の通り山間のヤセ地である。房丸達の苦勞は並大抵のことではなかつたに違いない。

房丸のこの事業は村民の強く記憶するところとなり、やがて神と祭られた。

百谷の人々にとって房丸は開拓者なのである。

(筆者は多治米の住人 本来多治米の史跡を紹介すべきであるが、干拓地のため何もない。そこで先祖の地百谷を取り上げた。読者の宥怒を乞ふ。)

私の好きなものⅡ (漫画)

桑田 東国

私と漫画とのつき合ひは古い。歴史の知識はあまり無いが漫画に関しても、もしも語るに足る相手さえいるなら夜を徹しても話題は尽きぬであろうと思われる。最近仕事に忙しいのでまもなく結婚以前は十種類位の週間誌を欠かさず読んでいた。気になるのである。何故この様に私がいい年して漫画の呪縛か

ら逃れられないかと言え、日本漫画は「成長する漫画」だからである。多くの漫画誌は『少年〇〇』と銘打ち、執筆者もあたかも子供を対象にしているかの如き発言をするが実は大違い。60年代初頭に「第何次」かの漫画ブームがあり、以来出版社も漫画家も「その時の少年」層のみを対象としてその成長に合わせて自らを変容させて来たのである。これはまさしく日本のみの特殊現象であり、外国ではこうはいかない。外国漫画の対象は一定年齢内にある少年であり、彼らは成長すると共に漫画から離れてゆく。故にそこには「意識的に成長しない漫画」というものがキチンと守られている訳だ。(この日本漫画の伝統を近年かなぐり捨てたのが『少年ジャンプ』であり、同誌はこの故に全く面白くない)

さて幸か不幸かこの「漫画世代」のみを追いつけた結果、日本漫画は60年〜70年にかけての時代の高揚を我がものとする事が出来た。それは普通考えられる様に現実を模写したり解説したりすることによってではなく読者の日々の哀歓と深いところで繋がることによって得られたのである。

最近漫画は馬鹿にされている。い

や漫画は昔から馬鹿にされて来たのだが最近のはタチが悪い。いやしくも漫画様が「教育」なんぞに利用されるなんて衰退ここに極まり、かつての漫画の質の高さを知るものにとっては悔しい限りである。何の話かと言え、例えば『まんが福山の歴史』だ。私の瞥見したところではこの本は単に文章を絵で書いたというだけのものでも漫画の名に値しない。「漫画は初心者や子供にも解り易く知識を伝える有効な手段です」とでも言うのだろうか、こういった発想程漫画的なものから遠いものはない。漫画は野卑で反社会的でケチな市民権なぞはしがってはいない。だけれどもそういった眼によつてしか見えない、また書ききれない真実というのもこの世には多いはずである。

備後の古墳シリーズ(Ⅰ)

曾根田白塚古墳

福山市青田町下有地久田谷

本古墳は標高約一〇〇メートルの尾根頂上付近の丘陵斜面に営まれた径約十二メートル、高さ約三メートルの円墳である。封土は早くより流失した上に石室の前方部約三メー

ル余りは既に破壊されて小径になっている。主体部は南に開口する花崗岩切石で石面加工が良好にならんでいる横口式石槨で、羨道部の奥により狭い石槨をつくっている。石槨部は長さ二・一九メートル、幅一・三〇メートルを計り、奥壁及び天井は一枚石を使用している。側面は左右ともに二枚づつを組み合せているが、右側は一枚石を二枚にみせる様に亀裂を入れ、左右対称を意識している。又、底石が存在しないのがひとつの特長で、その為元の高さは不明だが、奥壁部では現高一・二二メートル、幅一・八〇メートル、左右側壁ともに二個の石を配している。

以上の様に本古墳は、墳径に比して主体部が大きい点、横口式石槨で底石がない点、硬度の高い花崗岩の切石を用い、表面加工が良好になされている点、左右対称の意匠がうかがえる点、又、周囲に古墳がなく、孤立した存在である点などに於て特長的である。

時期的には、横口式石槨を主体とする終末期古墳としてとらえられるが、主体部の形態の流出から、石槨底部に床石がなく、石槨幅がやや大きめの点で、新市町の大佐山白塚と

猪の子一号古墳との間を埋める存在と考えられる。

さらに名称についても、切石の間に漆喰が埋められていた為「白塚」との名称が与えられたと考えられる。
△交通▽

中国バス福山柞磨線 有磨小学校前下車。久田谷方面への道を北行して久田谷に出る。右手の丘陵下の内田保氏宅左の山道を左丘陵に沿って尾根上まで登り、東へのびる尾根を登る。看板あり。

△参考文献▽

- ① 芸備文化第七号「備後に於ける三個の特殊石室墳」 府中高校地歴部・豊元国
- ② 芸備第九集 「広島県的主要古墳」 脇坂光彦

備陽史探訪

備中高梁への旅

後藤 匡史

六月二十二日梅雨空のもと、臨時例会として、岡山県高梁市にある備中松山城へ行った。

福山駅から倉敷へ、そこから伯備線に乗りかえて、備中の母なる河、高梁川にそって車中では、思い思いに

話に夢中となって、時々田植えの終った水田を見ながらの旅である。

高梁の駅に着いて、ふと見ると、前面に牛の臥した様な形から臥牛山と呼ばれる(標高四二〇M)なんでも日本で一番高い所にある城と云う。その山のいただきに、かすかに見える天守閣。いよいよあそこまで登るのだと思うと自然に足が前へ前へと進み、しかし総勢四十余人、老いも若きも一諸になつて行動をすることゝ思えば無理は禁物である。

昔の町並みを通つて行くと、あとは山道を一步一步進み突然キーキーと鳴き声、何んとお猿のお出迎えである。しかし帰りには会わなかったことを思えば猿は美人に弱いとか(ホントかしら)。又大石蔵之助が元禄年間水谷氏に変わり城受取りに行つたその時の大石腰掛け石があり、そのうち林の間に間に石垣が見えてきた。そして二重三重と天守閣を守る様に我々の前に立ちふさがった。

それから山頂では管理人さんのカミシモに着がえての笑いを誘う城の自慢話に聞き入りながら想いは遠く中世鎌倉時代仁治元年(一二四〇年)最初に城を築いた秋庭氏以来幕末まで城主十一代、城番代官を加えると十八氏四十八代、中でも築庭家とし

てあまりにも有名な小堀遠州、城代として入城したこともある大石良雄、幕末期、京洛の地に血の雨を降らせたと新選組が、もつとも頼りにした老中板倉勝静等。そして昼食後、天守閣へとその豪華な造りに皆んな感心することしきり。

其の後下山した後は大名屋敷や頼久寺では小堀遠州の庭の説明などを聞いて、それぞれが楽しい思い出を残して電車に乗り高梁を後にした。

古墳研究部会情報

前回もそうでしたが、今回も古墳講座の会場としている県立青年の家より、予約のキャンセルとの連絡があり、またか…と途方に暮れ、あれこれ悩んだ揚句、何と「画廊茶店・アポロ」に於て古墳講座を開いてしまいました。珈琲なぞすすり、優雅に、つつがなく無事に終える事が出来ました。

今回の内容は、丁度ガイドブックの数項目の中で、中間点に來ましたので、今迄の原稿の手直し版を持ち寄り、再度の検討を致しました。

次回、七月は前回の続きと、前期古墳について開く予定であります。

自慢ですが、今作成中のガイドブックは、一つの言葉、一つの表現に對してまで頭をひねり、髪を掻きむしり、考えて考えておりますので、かなりの御期待版ですぞ。それにしても、どないになつたらんやろか…青年の家は…と思う今日の頃。

追 古墳研究部会に對しての質問
御意見が御座居ましたら山口まで御連絡下さい。

備後の武將(二)

古志左衛門大夫豊綱

田口 美之

永禄四年(一五六一)の「毛利元就父子雄高山行向滯留日記」、閏三月朔日条に「御相伴衆」として見える古志左衛門大夫と同一人物であろう。

備後古志氏の系譜に就ては出雲古志系図によつて、「為信、宗信、吉信、重信、豊長」とする説が多いが疑問の点も少なくない。それよりも『水野記』十三、沼隈郡寺社に載す、「文安年中古志正光神社之削社領而寄七拾石、則古志氏代々天正之末到

古志元綱(神村庄八幡社)、「自古

志正光至古志清左衛門六代之中」

(本郷、今津村)とある正光から天

正末の元綱(清左衛門)に至る古志

六代をそれに當てる方が正しいと思

われる。古志系図にいう人物が備後

に住した確証は全くないのである。

又『水野記』には天文四年中神辺城主

山名理興と戦い、天文十四年今津劍

大明神を再建した人物として古志豊

清の名が見える。この人物の名乗は

備後守護山名氏(政豊、俊豊等)の

加冠を受けたものと推定されるが、

これは豊綱にも言えそうである。

更に先の元綱の「綱」は豊綱の「綱」

に通ずる。

これらの点からこの人物は『水野

記』にいう古志六代の内豊清と六代

目元綱の間に位置する人物と見て誤

りない。猶、備後古志氏は大場山城

(福山市本郷町)を本処に、沼隈郡

新庄(同上二帯)を支配した国人武

士である。



城郭二ニュース No.2

城郭研究部会

来れ！ 城郭講座

夏がやって来ました。この夏というやつは山城マニアにとって実にうつつうしい時期です。「山」に入ろうとしても雑草が繁り、どこからマムシ様が顔をのぞかせるかわからない、それは大変な季節なのです。

そこで我々が考えたのが涼しい冷房のきいた部屋で話を聞こうという『城郭講座』なのです。又この講座は新しい仲間を迎えたいという下心もあります。現在部会員は八名、初心者から初めから山に入るのは大変です。まず「山城とはどういうものか」を理解してからの方が易しいのです。どうかふるって参加下さい。

一回目は堤さんの話でした。武士と氏寺の関係等非常に興味深いものでした。以降の予定は次の通りです。

第二回城郭講座 七月十三日(日)

於市民会館。午前十時—十二時。

講師 七森義人。テーマ『古代山城について』

第三回城郭講座 八月三日(一四時)

於市民会館第一会議室

講師 田口義之 テーマ『中世の山城—備後を中心に—』

◎連絡先 0849-(53) 6157 (田口方)

秋季一泊旅行について

(初秋の宇佐・国東半島の旅)

本会では、特別例会と言う形で、年に一回、一泊旅行を実施しています。

今までの旅行をふりかえっても、奈良、山陰、山口、と どの旅行をふりかえってみても、楽しい思い出が一杯に湧いてくる旅行だったと思います。

旅行の目的地を設定するにあたっては、会員の皆様の希望を重視し、評議会で会議を重ねて決定するようにしていますが、今年は思い切って九州まで足をのばして、宇佐や、石造美術の宝庫と言われる国東半島を訪ねる計画をたてています。

往路は宇佐まで、新幹線、特急で、復路は国東半島を横断して竹田津から徳山まで舟便で、徳山から新幹線で福山までと言うコースを考えています。

ます。

国東半島は、大陸・畿内の双方の文化の接点であるため、早くより、仏教文化の洗礼を受け、国東半島独自の仏教文化(六郷満山)を形成していました。その独特の仏教文化の遺して呉れたものが、国東塔と言われる供養塔、磨、仏、石造の仁王寺の石造美術で、無数に存在しています。また富貴寺の如く、全国有数の阿弥陀堂も見事な出来事です。この国東半島の咽喉部、宇佐が早くから九州の政教の中心地であり、また、瀬戸内海に臨む海上の要路にあったため、大和文化の上陸地点となり、古くから大和政権とつながりを持ち、宇佐神社は国家の援助を受けて大きく発達しました。八幡信仰の発生の地と言われています。

宿は宇佐にとりました。魚の美味しいところです。要項は早いうちに送りしますので、こぞって参加して下さい。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

以上で6月末現在で会員総数は117名となりました。
(担当 井上)

投稿の御案内

。原稿は一行16字で書いて左記へ送って下さい。

〒720 福山市川口町三九八—十三

種本実 まで

次号は十月発行の予定です。